

# 千葉市大北遺跡の畿内産土師器

谷 旬

## 1. はじめに

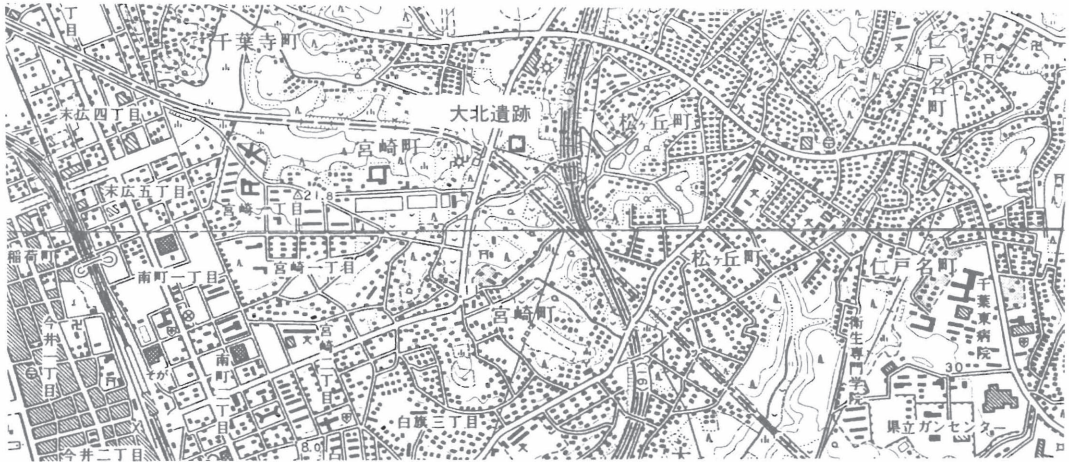
大北遺跡は、千葉市南東部宮崎町の「東京湾に直接開口する千葉寺谷と宮崎谷に挟まれた大きな舌状台地の基部に位置する。」(註1)

遺跡の調査は、京葉道路や千葉急行電鉄線建設に伴い実施された。いずれも線的調査に留まるが、主に古墳時代後期から奈良・平安時代に至る大集落の存在を確認した。竪穴住居跡80余軒の他に、東西、南北に整然と配された掘立柱建物跡27棟や大溝跡など、注目すべき遺構も多く、単なる古代集落とは異なる様相を示している。

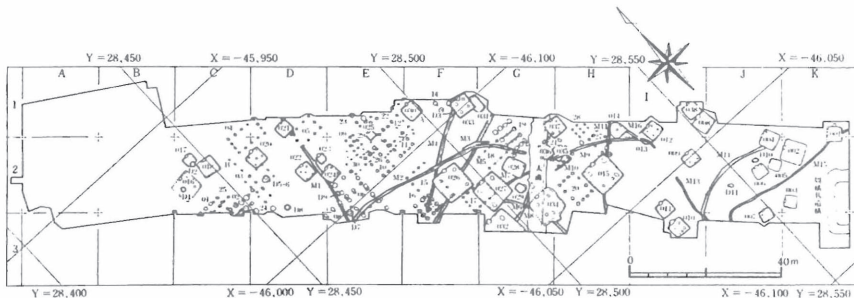
現在、この遺跡周辺にも大規模な宅地開発の波

がおし寄せ、千葉急行線建設に際し調査された鷲谷津遺跡・観音塚遺跡などは、面的調査により、当該期の大集落であることが知られるようになってきた。(註2)

「千葉県地名変遷総覧」(註3)には、下総国千葉郡千葉郷の項に「(宮崎)〔古葛飾郡、中古千葉之荘池田郷〕とあり、また「千葉市史」(註4)には北隣の池田郷に属すと考えられている。いずれにせよ、千葉寺・宮崎・大森・仁戸名などに展開する古代大集落は、律令制の一郷の単位からはるかに超えるボリュームを有す可能性があるように思われる。



第1図 大北遺跡位置図 国土地理院発行1/25,000図を使用  
<上> NI54-19-15-1(千葉東部) <下> NI54-19-15-2(蘇我)



第2図 大北遺跡遺構配置図 (S=1/2,000)

## 2. 資料各説

読者諸兄も既に御承知のとおり、当遺跡出土の畿内産土師器の詳細は萩原氏（註5）により報告済みである。今回はそのなかから若干の遺漏を補足し、氏の今後の考究に供したいと考え、本誌面を煩わした。出土資料の各説明は、既報告と同様の趣旨で一表とした。

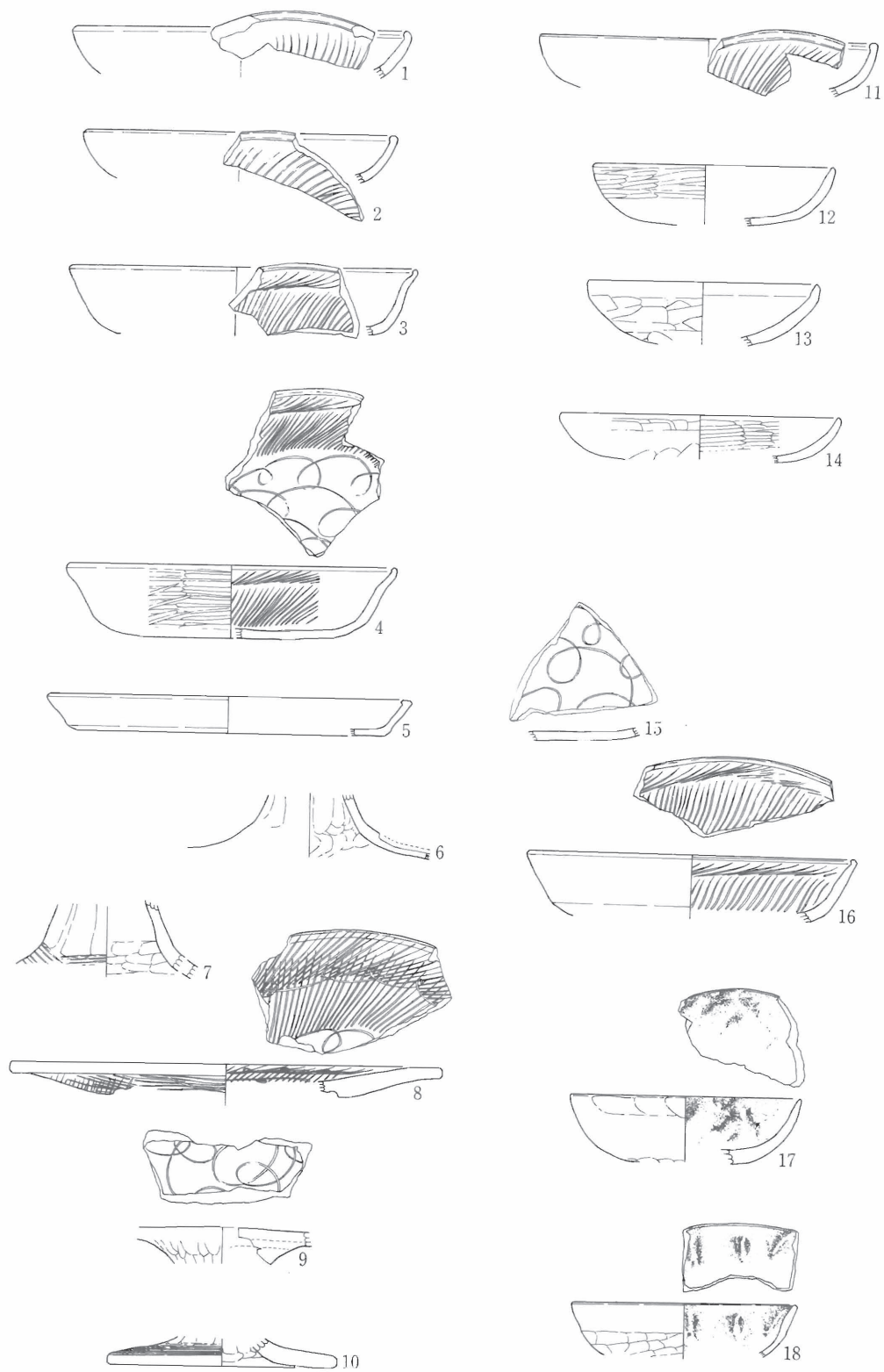
第3図のうち、1～7は018号住居跡の補遺である。1・2は内弯する浅いタイプ、3・4は口辺部で外反する杯である。5は盤形を呈し、内外表

面は剥落する。8～10は015住居跡の高杯3点である。坏部内面の螺旋暗文や、胎土・色調などから同一個体の可能性もあるので、ここに掲載した。

次に前回全く触れられなかった026号住居跡の一群が12～14である。浅い半球形を示し、磨き上げも部分的である。他の畿内産のものが、赤色で、一部スリップされていると思われるのに対し、むしろ黄褐色を呈す点で相異なるが、胎土や手法に地方のものでないものがある。（註6）

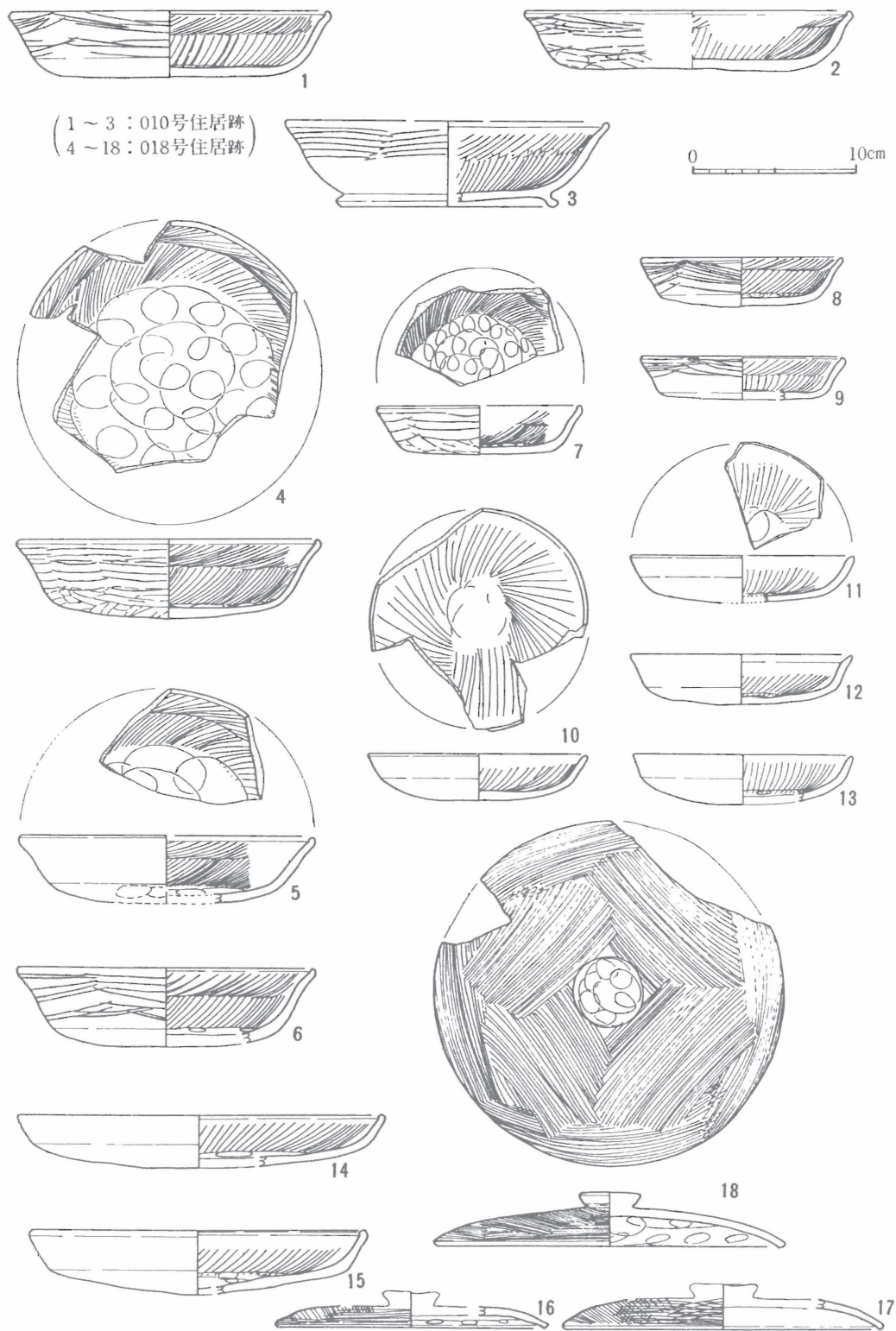
第1表 大北遺跡出土畿内産土師器一覧表

番号	器種	法量(cm)	調整・特徴	備考
1	杯A I	20.4×—	内面 斜放射状暗文	018住
2	杯A I	19.0×—	内面 斜放射状暗文	
3	杯A I	21.0×4.1	内面 2段の斜放射状暗文	
4	杯A I	19.9×4.4	内面 2段の斜放射状暗文、底部3重の螺旋暗文 外面 体部磨き	
5	盤	22.0×2.2	内外面とも二次的焼成で剥離、不明	
6	高杯	—	外面 へら削り	
7	高杯	—	外面 へら削り 裾部磨き	
8	高杯	26.0×—	内面 2段の斜放射状暗文間に螺旋暗文 底部螺旋暗文 外面 磨き	015住
9	高杯	—	内面 螺旋暗文	
10	高杯	(底径13.8)	外面 裾部磨き	
11	杯A I	20.4×—	内面 斜放射状暗文	034住
12	杯C II	14.6×3.6	外面 口辺部磨き	026住
13	杯C II	14.0×—	外面 へらナデ	
14	皿	17.0×—	内面 磨き 外面 口辺部磨き	
15	杯	—	内面 底部3重の螺旋暗文	グリッド
16	杯A I	19.9×—	内面 2段の斜放射状暗文	
17	杯	14.0×—	内面に2箇所灯芯痕	015住
18	杯	13.6×—	内面に3箇所灯芯痕	グリッド

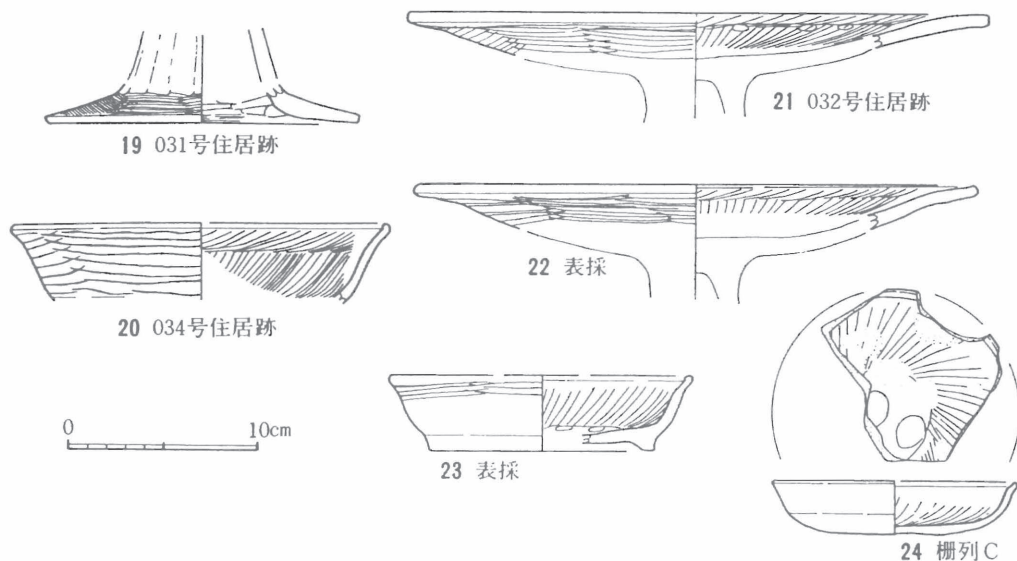


第3図 追加資料集成図 (S=1/4)





第4図 既報告資料集成図1 (S=1/4)



第5図 既報告資料集成図2 (S=1/4)

17・18は明らかに地方産の杯であるが、灯明皿として、利用された好例として取り上げた。

今回紹介した畿内産土師器も、萩原氏の説に従って「平城Ⅰ」の範疇に納まると考えるが、12～14にみられる特徴は、宮におけるごくありふれた一般汁器との見方もできそうであり、若干の時期差を考慮すべきかも知れない。

なお、第4・第5図は既報告の再録に過ぎないが、新たに写真撮影を行ったので、補足することとした。図の番号と写真は一致する。

### 3. おわりに

大北遺跡については、特に掘立柱建物群の出現期が飛鳥浄御原令施行期に符号する点、交通の要衝であった可能性を指摘し、萩原氏は「地方行政組織の整備時期と機を一にする」点を強調されている。(前出)

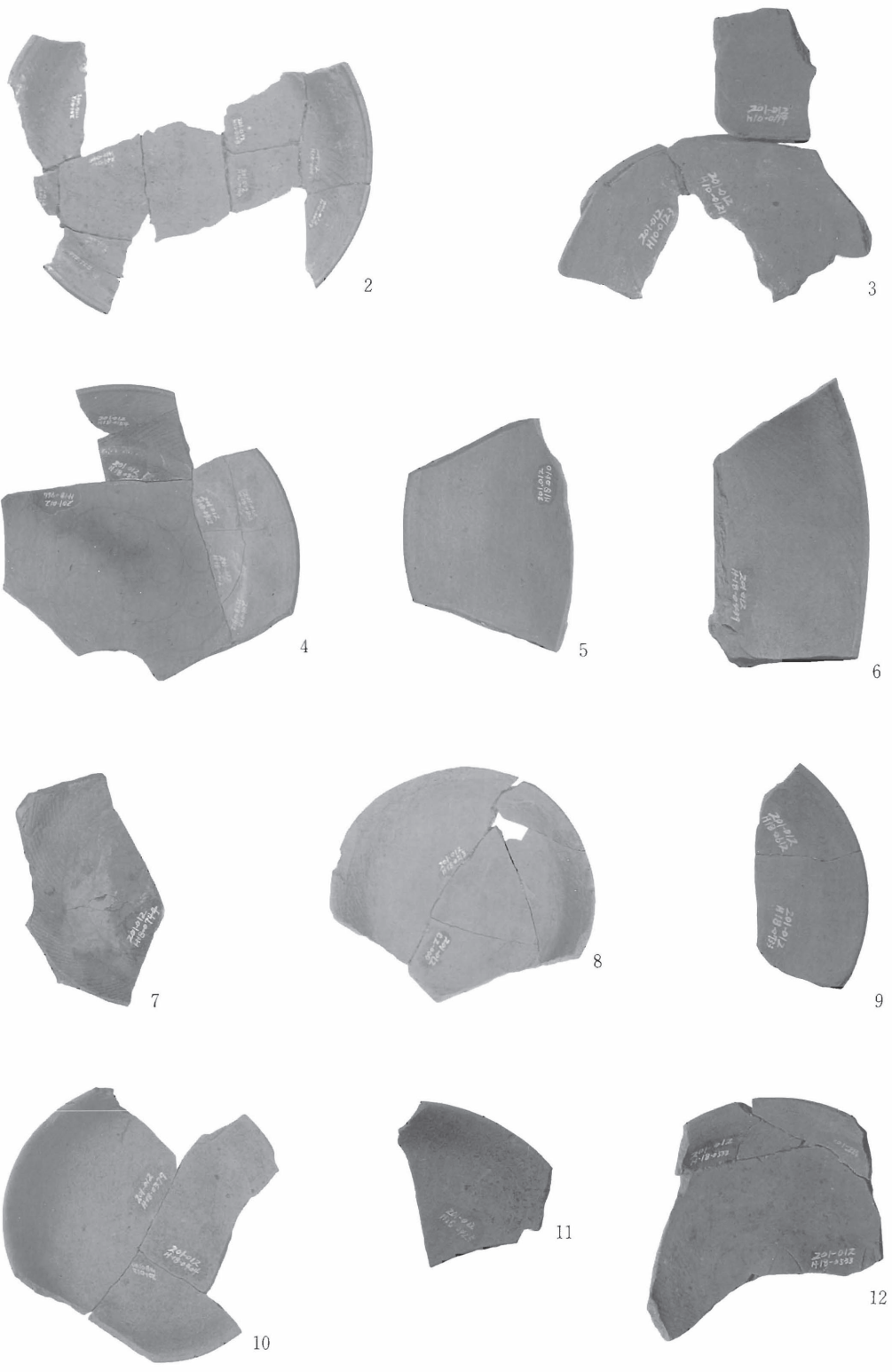
こうした大北遺跡の性格は、「在地豪族の邸宅跡とみられる遺跡」(註7)として大きく取り上げられたり、出土する畿内産土師器により、下総地方の土器の年代決定に用されたり(註8)、他方面か

ら注目を浴びることとなった。

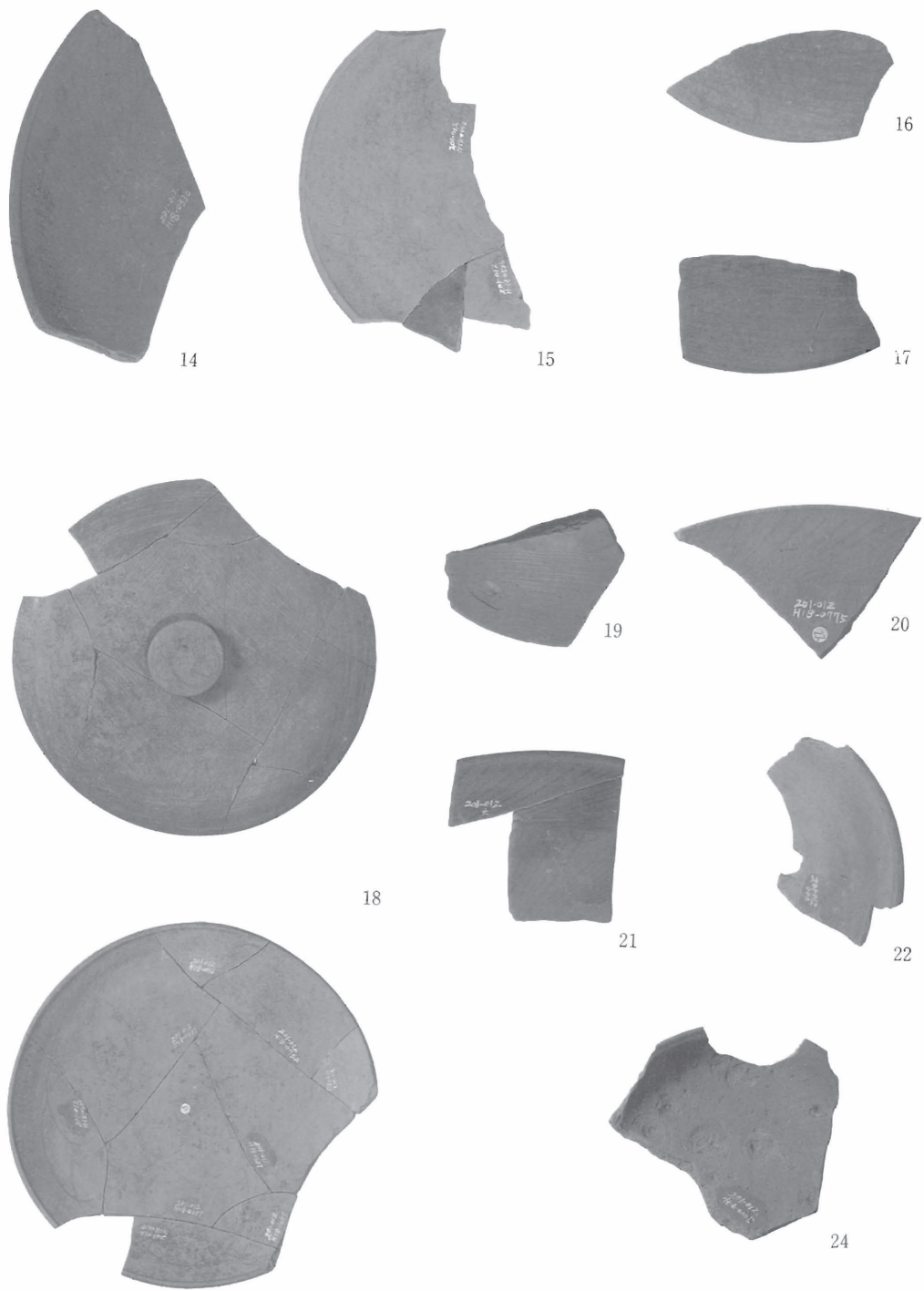
拙稿を供するに際し、報告者である萩原氏、千葉急行線事務所で遺物の整理にあたった小林清隆氏、畿内産土師器についての知見を伺った福田明美さんなどに感謝します。

### (註)

- 『大北遺跡・谷津遺跡・瓜作遺跡・池田古墳群』(財)千葉県文化財センター 1986
- 住宅・都市整備公団千葉寺地区の調査は現在進行中である。
- 『千葉県地名変遷総覧』千葉県立中央図書館 1972
- 『千葉市史』千葉市
- 前出1 144～154頁
- 福田さんの御教授による。
- 『再現・古代の豪族居館』(企画展示資料)国立歴史民俗博物館 1990
- 郷堀英司「下総に対するコメント」『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会 1987



第6図 既報告資料写真1



第7図 既報告資料写真2